The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	似雲法師の生涯
Author(s)	一箭, 喜美子
Citation	懐徳. 1961, 32, p. 50-70
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90361
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

似雲法師の生涯

一箭喜美子

一

今西行と呼ばれた歌僧似雲法師の生涯を考えてみる時、まず心をひかれることは、その歌と相卽して似雲の生涯をつらぬいて流れている西行への思慕の深さであり、更にはその深き思慕のこころのままに西行と同じく諸國行脚と詠歌とに徹したことである。西行と似雲、この二人の間にはもちろん時代・境遇・資質の相違はあるが、西行の偉大さと共に、似雲の生き方自體が尊重さるべきものと思われる。

似雲をしてかくのごとき生き方をなさしめたものは何であつたか、これについては似雲の生い立ちをみなければならないが(詳しくは後述)、八歳の時に母に死別した事が大きい影響を與えているのである。三十九歳という若さでこの世を去つた彼の母は常にやまと歌を愛し佛教の信仰篤き人であつた。亡き母を慕つてやまなかつた少年の日の彼は、その母の志をつぐことにより母の菩提を弔おうと願つたのであつたが、それは卽ち歌の道を學ぶことと、佛道に入ることであつた。ここに早くも彼の生涯を貫く深きこころが看取されるのであるが、この二つが實踐にうつされたのは三十六歳の時であつた。これはやや遲きにすぎるかとも思われるのであるが、彼自ら記すところによれば、それまで四たびも父に出家を懇願したのであつたけれども父は涙を流してそれを許さなかつたのである。その父も似雲の二十九歳の時なくなり、その七回忌をすませた似雲はかねての思い通り出家を遂げ、翌年京へ上り當時の歌壇の巨匠武者小路實陰のもとに入門した。似雲はそれ以後歌・佛兩道の修行に勵んだ。それは今は亡き母追善の日を送ることでもあつたのである。彼がそれほど慕わしく思つている母の命日、二月十六日

は奇しくも、

ねがはくは花の下にて春死なむそのきさらぎの望月の頃

と歌つて二月十六日に亡くなつた西行法師の忌日と同じ日であつた。彼はこの奇しき因縁を深くよろこんだのであろう。二十三歳の若さで突然出家した西行――その命日に、歌に心をよせ信仰の深かつたわが敬慕する母もこの世を去つたのだ。この奇縁に心を打たれた似雲の西行思慕の生活がここに始まるのである。母への追慕追善の心が西行思慕の心と一致したところに似雲の生涯を貫くこころを察すべき根本の眼目があろう。また、ここに彼の生き方の純粋性の祕密があるとも言えようか。彼は

西行に姿ばかりは似たれども心は雪とすみ染のそで

と詠んでいるが、ともかく彼はこの奇しき因縁を深く感得し、自然を心の友として旅に生きた西行の足跡を求めて諸國行脚の旅に出たのである。すみ染の衣を着て旅をし歌を詠む、そういう姿だけは西行と似ているが、西行の心と自分の心とをくらぶれば、雪と墨のようにちがうと歌つているのである。しかしこれはもちろん謙譲の氣持で詠んでいるわけで、彼自身西行の姿だけではなく、その心を己が心とし旅を續け歌を詠んだ。そして彼の西行思慕の生涯に於て最も感激的な事件は、彼が六十歳の時長く探し求めていた西行の墓を、石山寺に七日七夜參籠し、觀音菩薩の靈示を得て河内の弘川寺に發見したことである。

尋ねえて袖になみだのかかるかな弘川寺にのこるふるつか

西行塚を發見した時、彼は地に身をなげうち涙にむせかえつたと自ら記しているが、その感激はまことに胸に迫るものがある。彼は晩年この弘川寺に多く住み櫻の樹を千本植えて、

ほとけには櫻の花をたてまつれ我が後の世を人とぶらはば

との西行の遺詠のこころを實踐したが、遺言して西行法師の墳に侍するが如き位置に葬られた。彼歿して今（昭和三十六年）に至るまで二百八年、西行思慕の誠、西行と相離れざるこころを我々に如實に示しているのである。

さて似雲法師の歌はすべて「としなみ草」に記されている。「としなみ草」は似雲三十八歳の時に起筆し、七十六歳（八十一歳で歿）までの約四十年間の歳月をかけて、自分の著作（歌・紀行文・隨筆など）を自分自身で整理し書きついだ二十卷の自筆歌集であり、生活記錄であり、自敍傳であり、「としなみ草」こそ彼の生涯の完結である。彼はそれを完成した翌年の西行の忌日、二月十六日に弘

川寺に奉納している。西行思慕へのひたすらな生活を送つた彼が、その生活記錄を綴り終るにあたつて西行の靈前にささげた彼の氣持も察することができよう。

彼の生涯を考察する資料としては「としなみ草」のほかに、似雲が最晩年の四、五年をすごし往生をとげたところである和泉（蹈尾）の北村邸の常樂庵や、鄕里の廣島の生家などに、書簡等いくらか殘つているというが、しかし根本資料としては「としなみ草」で十分足りよう。右に似雲の生き方を概觀しただけでもわかるように、「としなみ草」の中に收められている歌・紀行文・隨筆などは、彼の生涯をとらえる資料となりうるのであつて、以下「としなみ草」（弘川寺・土橋眞吉共編、昭和十八年發行・全國書房）を資料としてその歌や文章によつて彼の生涯をやや考えてみたいと思う。四千五百餘首という歌數に比して歌人としての彼の價値は日本文學史上あまり高く評價されていないが、その至純にして徹底した生き方は我々を感動させるものがあり、その生涯にこもるこころはいよいよ精しく考察さるべきであると思うのである。似雲の生き方を知るためにはその歌を、歌を理解するためにはその生涯を……この二つの相關關係に於てとらえねばならないのであるが、本論では特に似雲の生涯という側を主として考えてゆきたい。（註1）

二

彼の生涯は三十六歲の出家という一事をもつて大きく二期にわけることができる。卽ち

第一期　在俗の生活（一歲～三十六歲）

第二期　出家の生活（三十六歲～八十一歲）

右の二つの時期（特に第二期は更に細かく分けて考察しなければならないのであるが）、のうち先ず第一期について述べてみよう。

似雲は寛文十三年（西曆一六七三年）一月二日、廣島で、酒造を營むかなり裕福な商家に生まれた。彼が幼い時にいかなる教育をうけ、どのような生活を送つたか具體的にはわからないが、「としなみ草」卷第二十に收錄されている「思出草」という彼の自敍傳ともいうべき文を讀むと、

とをのとし大學をよみならひし時、大學章句の終りとよみをはりて、げにはじめあれば何事もをはりあり、われ今幼年なれどもつゐには命終るべしとしきりにかなしくて、此時發心きざししかど其後もわらはあそびにこころをとられて忘れがちにすぎつれど、又折ふしには彼終の一字、つと思ひいづることやまざりき。

右によれば十歳にして「大學」の素讀をうけているのであるが、このことから相當教養ある環境に育つたということが察せられるのである。そして注意しなければならないことは、大學章句をよみ終つた時「終」とあつたその一字のことばに十歳の子供ながら強く心をひかれているということである。「げにはじめあれば何事もをはりあり、われ今幼年なれどもつゐには命終るべし」こういう「命終る」とか、「死」とかいう人生の無常を幼くして考えたについては、彼が八歳にして母を失うという悲しい體驗を持つていたことが考えられるのである。彼の母は三十九歳でなくなつたのであるが、この母の死という精神的打擊が十歳の彼をして、「われ今幼年なれどもつゐには命終るべしとしきりにかなしくて……」という感慨をおこさせたことは想像に難くないのであつて、このことは彼が豐かなる宗教的心情に惠まれた人であつたことを如實に示すものであろう。

而して序文で考察したごとく、彼が佛道に入り歌の道を修めんとしたのは若くして世を去つた悲母の志を代つてとげるためであつた。そのことは「思出草」に次のように記されている。

さてそれより年のそひ行ままに、つくづくと思へば、たらちめさきだちし時、いはけなうしてとばかりもつかへしことなく、其面影もおもほえず、せめて母の心ざしをしりなばそれをだにつがまほしく人にとひききてはンべりしに、常に大和歌をこのみ、とし老なばいかにもして、都近き山陰に世をのがれかくれて心のままに月花をながめ、念佛となへつつしづかにをはりをとげんとのこころざしありとなん、されどよそぢに一とせたらぬ年のきさらぎ十六日に身まかりぬ、其程すぎていのちながくは、母も思ひしほいをとげ、われも親の姿心ざしをもしりてましものをと、したひかなしめどもさらにかひなし。

大學章句の「終」から、命終りし母のことを思い、いわけなき八歳のころとて、孝養を盡すこともなく先立つていつた母、その母の定かならぬ面影をしたつては、母を知れる人に在りし日の母の有樣を尋ねきいたところ、「平生、大和歌を好み、年をとつたら何とかして、都に近い山かげに遁世して心ゆくままに月や花を眺め念佛を唱えながら靜かに往生したい」というのが亡き母の志であつたと聞かされたのである。そしてその母は三十九歳の年で延寶八年二月十六日、日頃の志をとげることなく夭折したのであつた。

せんかたなさによみし歌をと尋れども、在し世にかいやりすててはンべらず、猶とかく求めとめぬれば

手馴しちいさき箱あり、是をひもときて明ぬれば我生しときのうぶかみほぞのをを紙につつみて、其うへに寛文十三丑年正月二日巳ノ刻誕生すとしるし、二首の歌を水莖の跡に殘せり、見るや涙にむせかへりつつ思ひあはすれば、人のいひしもげにたがはざりけり、かくしをきて、なき跡にのこしつる心ざし、我にも世をすてて歌よめとの親の惠み、親の守りならんと、一かたならず思ひつつ、しばしは夢かとたどられて、うつし心もはンべらず。

右の似雲自ら記すところによれば、彼は人の話だけでは物足らず戀しい母のおもかげを求めて、歌をこのんだというからせめて詠みおかれし歌でもと探してみたけれども見つからない。その時母の手馴れし小さな箱を見つけるのである。ひもをといて明けてみると自分の產髮（うぶがみ）と臍（へそ）の緒であつた。ていねいに紙につつみ、その上には「寛文十三丑年正月二日巳の刻誕生す」（この記事で似雲の生年月日がわかる）とかかれ、更に二首の歌が記されているではないか。「見るや涙にむせかへりつつ……」とあるが、なつかしい母の歌をよみ、その筆蹟を見て自分のへその緒を手にはらはらと感激の涙をこぼしている似雲の姿が髣髴と目にうかんでくる。この部分は彼が自身の生涯を綴つた「思出草」の中でも亡き母を慕う至情があふれていて最も印象的で感銘を深くさせられるところである。しかし殘念なことにこの二首の歌は具體的にはわからない。（註2）

ここに母の志をつぐことによつて、幼なかつたゆえ十分に仕えることの出來なかつた亡き母の靈にせめてもの孝養をつくそうという念いが似雲の心に深く根をおろすのである。そして彼の生涯を深く貫く心情の祕密がここにあると知るのである。彼はなおも內奥の心情をこまごまと記している。

されどかくてのみやはと思ひおこして、いでや此心ざしはつぎなんものをと、いとど世のわざうとましうなりぬれどわかかりし身のならひとて、つまをむかへよとすすむる人々おほかれどほだし求めなば、いかがはせんとかたくいなみけれどある時は色にそみ香にときめき、ひたぶるに心ひかるるかたなきにしもあらず、とすればかかり、かくすればこころみだれて、さながらささがにの糸のごとく世網まつひてとけがたかりしも、よしさばれとおもひきりて、四たび迄家を出なんとせしに、たらちお涙を流しゆるし得ざれば心よはみてとし月をくりしに、つゐに此おひ人も此世をさりはンべりぬ、父には年久しくつかへしかど、さらぬわかれのかなしさ、いづれかをろかならん、さりて後、七とせめぐりしのりの

わざなンどいとなみすぐして、みそぢあまり六とせといふ、神無月立待月の夜、一衣一鉢の身となりて、又の年の春都にのぼりし嬉しさ、籠鳥出て雲に羽うつ心地なんしける。

右の文の終が卽ち第一期の終であり、その出家が如何に嬉しかつたかは、「籠鳥出て雲に羽うつ心地なんしける」という言葉によつてよく察せられる。そして一筋に若き頃よりの願に向つてすすむのである。卽ち第二期の出家の生活へと。その前にもう少し右に記された文によつて考えてみよう。右の文が第一期在俗の生活を知る上の唯一の而も最も確實な資料である。

彼は母の志をつがんとする念いが日增しに深まると共に、世俗的なことを厭う心が强くなつた。しかも酒造を營む富裕な商家の家業を繼ぐべく要請される身分である。（系譜の上では二男であるが長男は早世した。）又、青年時代の「色にそみ香にときめく」心に强くひかれることもあり、彼の心は兩極にゆれることもあつた。（もつともこれは彼の敏感な反省の心より言われたものでもあつたろうが。）しかし、遂に心を決して世網のまといを斷ち切つて出家せんと志したが涙を流しての父の懇願によつて四たびまでも思いとどまつている。ここに彼の善良な心情と苦衷を察することができよう。ついで彼は父の死に遭つた（元祿十四年似雲二十九歳の時。）「父には年久しくつかへしかどさらぬわかれのかなしさいづれかをろかならん」と記しているが、孝心厚かりし彼の悲しみは察するに足るであろう。しかも彼は父の七回忌の追善法要を終えるまでは、あれほど願つていた出家を敢えてしなかつたところに、家業をうちすてることの出來ない立場であつたことを考えても彼の立派さをうかがえるのである。七年父の道と志とを改めなかつた彼は母に對しても父に對しても克く孝であつた人である。

彼の第一期の生涯についてあまり具體的に知ることは出來ないが右の如くその心情の祕奥を彼自身記した文章によつて知り得たことで十分滿足すべきであろう。

三

次に第二期似雲の出家後の生活について考えてみよう。「手向草」（「としなみ草」卷八註2參照）によれば、

三十あまり六とせといふ神無月立待月の夜ふるさと
あきのくに、いつくしま、光明院にて一衣一鉢の身
となりて、又のとしの春彌生のはじめつかた都にの
ぼりはンべりぬ。

とあるから、寶永五年十月十七日（三十六歳）故郷安藝國の嚴島の光明院（淨土宗）で得度をし、名を「如雲」と改

め翌年の春三月上京した。この「如雲」という法名を後に「似雲」と改めるのである。(註3) いずれにしろ「如雲」「似雲」という命名にも彼の性格なり心情なりがよく反映されているように思う。

さて第一期で述べた通り籠の鳥が大空にはなたれた如きよろこびを以て上京した彼であつたが、「思出草」の記述に依れば、彼は今より都に住んで志した道に進もうと思つたけれども現實に直面すれば色々な支障がおこつて心のままにならなかつた。いつそのこと都を出ようかと思つてはみたが、また歌の道の修業はやはり都でなければできぬと思いかえしたり、あれこれと己が志の達成を願つて悶々の日をすごしていたところ、折から親切な某僧都のとりはからいにより、かの僧都の別業であつた小倉山麓の靜かな草庵に住むことになる。「ここに身をかくしぬて時のいたるを待べし」という僧都のことば通り、都よりはこの僧都と風よりほかには誰も訪うものとてない庵でわびしい月日を送つていた。

やがて時が來り當時の歌壇の中心的人物であつた武者小路實陰卿のもとに入門することが出來たのである。似雲四十一歳の時である。その時の喜びを次のごとく記している。

佛神の御たすけ有けるにや、今の世の道の御堪能の御許よりめされしこと、身のおもひでは是ぞはじめなりける、此御館に年ながくはンべりし比、さまざまの御道引御惠みの露、をき所もはンべらず嬉しさ有がたさ身にもあまり、袖にもつつみがたくはンべれど、外へもらすべき事にしもあらず。

武者小路實陰は後西院より古今傳授を、靈元院より勅點をうけ當時堂上に於ても最も重んじられた歌人である。その實陰のもとにどうして似雲が入門することができたのか、ただ「佛神の御たすけ有けるにや」とのみあるだけでいかなる紹介者があつたのか判明しない。特に歌道というのは古い傳統があるだけに一流の歌人の許に入門するということはそうたやすくはかなえられないことだつたのにちがいない。それ故實陰の家に寄食し、歌を學ぶことが出來るようになつた彼のうれしさいかばかりであつたかは想像に難くない。こうして似雲は實陰のおかげで歌の道を學び當時一流の歌人たちと交ることも出來た。第一期の考察により理解されるように出家をすることと、歌の道を學ぶこととは、彼にとつては不離一如の關係にあり彼の念願であつたが、實陰もまた佛道と歌道との一體不離なるを敎えたよき師であつた。(註4)

師實陰と似雲との關係についてもう少し考察してみよう。(註5)

武者小路家に寄食していたため「としなみ草」巻一（三十八歳から四十九歳八月頃までの歌を收錄）には「武者小路家ニテ當座」という詞書のある歌が非常に多い。所が似雲四十九歳の二月七日、

武者小路大納言實陰卿六十歳の賀によみて奉る

君ぞ見む梢のあまたに言の葉もさかふる松の千世をかさねて

と詠んだのを最後にそれ以後「としなみ草」には實陰が歿する年まで二十五年間、實陰という名はほとんど出てこない。わずかに二、三箇處似雲の思い出の中に語られているのみである。「思出草」にも、

……いささかのことにことよせてここをさりはンべりぬ。

とある。右の文の「ここ」とは實陰卿の所を指すのであるが、似雲が武者小路家を辭去したのはいかなる理由によるか、はつきりしたことはわからない。ただ以上のことから推察できるのは似雲四十九歳の頃より西行思慕の氣持の昂まるままに彼は草庵に行脚にと自主的な生活を欲したためであろう。師から離れていつたのは決して冷淡になつたとか、意見が喰い違つたとかいうのではなくて似雲が師の庇護をはなれて獨自な道を歩み得るようになつたことを物語るものであろう。

似雲六十六歳の元文三年、實陰は七十七歳で亡くなつたが、恩師の死を聞いた似雲は嵯峨の草庵にこもり、御經を書寫し、南無阿彌陀佛を上にすえて六首の歌を手向けた。以後一周忌、三回忌、七回忌にも追善法要を修し歌を手向けている。亡き親を慕つてやまなかつた孝子であつた彼は、亡き歌の師に對しても追慕の誠をつくしたよき弟子でもあつた。

四

前述の如く實陰の許をはなれて自らの道を進もうとした彼は信仰と歌との一體不離を行脚によつて實踐してゆこうとした。そしてそこに西行への傾倒が深まるのであるが、その西行を慕う心はいつごろから強く彼の心を占めるようになつたのか具體的にはわからない。(註6)「手向草」（母の五十回忌追善の一文、（註7、註2をも參照））によれば、母の忌日は「はからざるに」あの「花の下にて春死なん」と詠んだ西行の忌日と同じであつた。わが國や中國に古今世捨人は數多くいたけれども、自分はとりわけこの西行上人を年來「慕わしく」思つていたと述べているところから、彼の西行憧憬はかなり遠い昔から彼の心の底にひそんでいたものと思われる。その生涯が出家、歌、旅という心情において似ていることに自ら親近感を感じ全

ての點において先達として仰ぐ心が深かつたのであろう。そして今忌日の一致ということを知つた彼は母への思慕の情と共に西行憧憬の心を一段と高めたのである。このような氣持から五十七歳の二月十六日に自らの生葬を行つたのである。「沐浴して剃りし髪をふる里のゆかりのある人の許へつかはす」と共に西光庵主瑞巌和尚のすすめにより「櫻の一木をうつし栽」え、その木のもとに落ち殘つた髪をおさめて、

思はずも櫻一木をたれうへてわが後の世の春を見せける

と詠んだ。この歌は西行の「佛には櫻の花を……」の歌をふまえていることも明らかである。そして西行や母の追善と共に自分の一周忌や十三回忌をいとなむという有様であつた。彼は寶暦三年七月八日八十一歳を以て往生するが、どんなにかこの二月十六日という結縁の日に死なんと願つたことであろうか。彼のひたすらな西行思慕の氣持の程がよく察せられ、心すでに母と西行の命日に死した彼の今後の生涯の純一無雜さを知ることができるであろう。

西行の名は彼の行脚の生活の中に語られる。心も身も歌もその足跡にもすべての點に西行との一致を願つて旅に出た彼が、西行の足をとどめ歌を詠みし所に、彼もまた己が足をとめ西行をしのんで歌をよんだのである。これが似雲の後半生の最も大切な點であるので、以下特に西行と關係のある歌を中心に彼の行脚の生活を見ていくことにしよう。それは似雲の深き心情にふれることに外ならないのであるから。

五

行脚の足跡は「としなみ草」の記述と歌とによつて詳しく辿ることができる。「旅行せし思ひ出は、くにぐにを見めぐりし靈蹤古跡あまたにして今更かぞへ盡しがたし」（「思出草」）と言つている如く、彼の足跡の全てを辿ることは紙數もゆるさないこととて、極めて頻繁に遊んでいる都より比較的近い場所、例えば吉野・高野・難波・石山・須磨・明石・和歌浦などについては特に重要な記事以外はここでは取りあげず、又かなり長い旅行についてもその足跡を簡單に記して西行思慕の心のよく現われた點を主として記すにとどめておきたい。

まず武者小路家を辭去したと推察される年（享保六年・四十九歳）の伊勢詣での旅である。九月九日に草庵（嵯峨の任有亭）を出、十月八日に歸つたので、「手をおりてかぞふれば旅行の日數凡そみそかになりぬ、よつて此まきをみづからみそか草といふ」と、彼はこの旅の記錄を

「三十日草」（「としなみ草」巻二）と名づけた。「三十日草」の最初に、

享保六年九月九日
大神宮にまうでんと草庵を立出るとて

とあるからこの旅の目的は伊勢神宮参詣であつたことがわかる。伊勢は西行が世の動亂をながめつつしずかに住んだ所であつた。鈴鹿山を越える時、

西行上人鈴鹿山うき世をよそにと讀み給ひしも
ここにこそと思ひ出て
ふりすてぬ心なりけりすずか山うき世をよその身の類にて

と詠んだが西行の歌というのは、

世を遁れて伊勢の方へまかりけるに鈴鹿山にて
鈴鹿山憂世をよそにふりすてていかになり行くわが身なるらん

というのである。本歌である西行の歌の格調、高さには及ばぬようであるが、西行にすべてを倣わんと願つて而も謙虚な彼の心情が察せられるのである。十六日外宮、十七日内宮へ詣でたが丁度御祭の行われる日であつたのでいつもとちがつて御階のもとまで行つて間近く拜することができ「たふとしといふもさらなり」と感激している。二十三日津を出て「あづまぢにをもむかん」としたが「風いとはげしくてすすむに心なし」とあきらめて歸途に着く。十月六日に彼はもろは山をすぎ、毘沙門堂に參詣し、その日「松貞尼のすまれし跡」をたずねている。松貞尼というのは似雲の母が幼なかつた時の友であつたが、「ここに世をのがれかくれて、常に大和歌をたのしみ座禪念佛しておこなひすましつつ、しづかに終りをとりし人」であつた。年のころ六十歳と八十歳位に見える松貞尼の弟子が二人住んでいた。その中の一人もまた母の幼き頃の友であつて似雲はここで片時も忘れることの出來ない母の話をきき、再び母に會つたかのごときなつかしさに涙をこぼすのであつた。

こまやかにむかし物がたりせられしを打うなづきてきけばたらちめに又二たび相まみゆる心ちして涙とどめがたし
えにしありてとへばこときけたらちめの昔の友のむかしがたりを

松貞尼のお書きなつたものを見たいと望むが以前京の人に貸したとかで「玉手の記」一巻しか殘つていなかつた。母の幼き折の友、しかも母の願いと全く同じ願いに生きた松貞尼のかき殘した水莖の跡「くりかへし見るにふみのかきさま、歌の心ばへ哀れ淺からず」それを通して母を偲ぶ彼の切なる心を察することができよう。

伊勢詣でから歸つた彼はその翌年五十歳の春を迎えて「年頃思ひこし富士のやま見まほしく思ひ」二月の二十日すぎ草庵を出た。西行が富士に心をよせたことは有名であるが、似雲もかねてより富士を見たいと望んでいたのである。去年の旅と同じく鈴鹿山を越え三月十一日、四日市にてあるじとの物語に鵜飼の話をきき「生をくるしめ物をころしをのがしばしのいのちをやしなふことよとその罪の程を思ひはかるもいと悲し」と鵜つかいの罪の深さを歎き、更に西行法師が備前の國で、「たてそむるあみとるうらの釣竿は罪のなかにもすぐれたるかな」と詠まれたのもなるほどと思われ、自分も幼い時釣して魚をたくさんとつたこと、くりかえし悲しく思うけれども今や致しかたがないと述べているが、彼の僧侶としての心、宗教的な思いがよくにじみ出たいい文である。舟で熱田に渡り八橋の跡をたずねては伊勢物語の昔をしのび、三月二十日二川の松原を行く時馬子に教えられて待望の富士の雄姿を仰いだ。

……是より雲のやうに白く見ゆるは富士の山なるをと指さしけるに、うれしくめかれせず、潮見坂へ行のぼり心しづかに眺望して

天地の時はしりけり雲の上に殘るも霞むふじの白雪

よしだを出て歸途につく。桑名のあるじ後藤悠見と共に

又伊勢に參るがその出立の時に、

伊勢にまうでんと出れば此子五ッ六ッばかりなりしが親の別れをおしみてしたひこしを、道の邊に咲きしすみれたんぽぽの花なンどにて何くれとすかしなぐさめて立わかれ行とて

つれなさになりもやすらむすずか路をふりすて出る

けふの別れは……この歌は悠見の作……

ほんのしばらくの別れというだけでも子はこのように親をしたう。この有様を見た似雲は二十三歳の若さで突如官を辭し妻子を捨てて出家した西行（佐藤義清）のことを思い出した。

かりそめの旅のわかれだに、かかるは人のならひなりしを彼のりきよといひし人つまこをもかへり見ず、官家を出て身をば墨染の衣にやつし、鈴鹿山うき世をよそにふり捨てて、いかになり行我身なるらむと、詠ぜられしこと思ひかへせば哀れともたふとしとも。

伊勢に參り、伊勢の海邊でほんの一瞬波の上に日の出前の富士を見ることもできた。ここから吉野に入り、更に高野山では三か月ばかりをすごし、高野を下りてから南紀へと足をのばして十月八日、約七か月半ぶりに洛外の草庵に歸つた。

享保十一年五十四歳の時、三度目の伊勢詣でを果し、歸

りに養老の瀧、不破の關などをたずねているが今度は四十日餘りの短い旅であつた。その道中、岐阜で芭蕉が筆記したという十八樓へのぼり、芭蕉自筆の一軸をひもとき、

こころみて、ここにのぞめば、かぎりなき山水、野村、よく水莖の跡にうつせり。

と記しているが、西行の心を深く理解した芭蕉（元祿七年五十一歳で歿・似雲二十二歳）に對する更にくわしい彼の感想をしる由がないのは殘念である。

享保十五年五十八歳の時、彼は東國行脚に出た。彼の生涯中一番大きい行脚である。彼の敬慕する西行は周知の如く二十六歳の時と六十九歳の時の二度も奥羽への大旅行を行つているが、彼にとつてこの東國行脚は大きい夢であつたにちがいない。西行が六十九歳の老體で東國行脚を行つたに比べれば、似雲は十歳も若かつた。しかし若いといつてもはや五十八歳、たつた一人で都をはるかに離れた東國へ大行脚に出るには相當の決意を要したことと思う。彼は出立にあたつて以前自分の生葬を行つてくれた洛西双岡（ならびの）の西光庵主瑞嚴和尚に宗旨證文（註8）を受けている。この證文には、「この僧、宗旨は淨土宗で、行脚の途中もし萬一の場合は死骸はどのようにお取置き下されても文句は云わない。」という旨が記されていて、これを見れば死に備えてのことだけに、彼が強い覺悟、悲壯な決意をもつてこの大行脚に出たか推察することができよう。似雲は深く靜かな心の持ち主であつたが、その內奥には非常な覺悟を祕めていた人であることはこれまでの考察によつても十分に知り得ることである。さて彼はこの一年五か月にわたる大行脚の記錄に「窓の明ぼの」と題したが、それは元旦の富士を見た時に詠んだ歌（後逃）よりとつたのである。また、

元日の富士のけしきを見まほしく思ひながら、年ごろいたづらに過はンべりしに、いまだ相まみえざりつる。並河先生は風流の老儒雅にて伊豆のみしまに富士見亭とて庵室をしつらひをかれしに、そこにまかりて彼ほいとげなばとげねなど有ければ……取物もとりあへず神無月十日あまりに洛西嵯峨の草庵を出で……。

と記していること等から、元旦の富士の麗姿を拜するというのが年來の希望であり、それがこの行脚の目的であつたと思われる。「窓の明ぼの」の最初に、

遠き所も出たつあし本（もと）よりと、かろらかにすみのころもをきなし、うしろにはつつみもの前にせし袋には彌陀の尊號、ひゐな形の三衣、古今、伊勢物語、山家集、草庵集なンど、秋の田の硯に短册とひらばかり……。

と東國行脚に携さえていつた品々をあげているが、西行の山家集が彼の袋の中に入つていたことは忘れてはならないことである。逢坂の關をこえいよいよ京とも別れねばならない時に、

はなれがたきは都なりけりとよまれしもげにさるものにて何となうみやこのかたに心ひかるるやうに有しかば、是なむこころのほだしなりけり、行めぐりなば都へも又いづべしと意ふこそ、同じことながらよからめとおもひはンべりて其心ばへを

立かへるこころぞほだし命あらばまた都にもめぐり行なむ

と詠んでいるが、西行の

歸りゆく人の心を思ふにもはなれがたきは都なりけり

という歌を思い出したのである。悲壯な決意を持つていただけに、都を離れることにしみじみとした旅の哀愁を感じ、ひとしお西行の心がしのばれたのであろう。潮見坂では十年ばかり前にここに立つて初めて富士を見たその面影を頭に描いて雲の中の富士の姿を暗中に模索した。

（十二月）十九日の朝空のけしきしづかにはれて行ままに小夜の中山になりければ命なりけりと有しことも身のうへにおもひしられて

立歸りまたもこゆべき命かはよはひふけゆく小夜の中山

と詠んでるが、小夜の中山での次の西行の詠は有名である。

年たけて又こゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山

また西行を慕つた者として芭蕉を思い浮かべる人も多いことと思うが芭蕉も

いのちなりわづかの笠の下すずみ

と詠んだ。こうして西行、芭蕉、似雲、三人の詠を並べてみるとき、芭蕉も似雲も追慕する西行の心を心とし深い感懐をもつて句をよみ歌をよんでいることが察せられる。享保十六年五十九歳三嶋の富士見亭に初春の富士を見た。

聞しよりも見るはまさりて心有けるすまゐ、千秋のふじのみ雪をふくめる窓の曙にうれしく春をむかへて

春にあふ身の思出はふじのねやゆきよりしらむ窓の明ぼの

二月三日鳴立澤では、

人すみて哀もあさき澤水にしぎのみたちし昔をぞお

もふ

この歌は西行の有名な

心なき身にも哀はしられけり鴫たつ澤の秋の夕暮

の歌をふまえていることは明らかである。

鶴が岡八幡宮に詣でて

思ひいづればいにしへ此所にて西行上人時の武將に見え給ひて白がねの猫を重くうけ輕くすて給ひしこと、まことに愛憎取捨をわすれて心に一點のかかづらひもなく、瀟洒たる風骨したふべし、うらやむべし。

白河の關を越え松島にては、

此間の風景うつさんとすれど筆かぎりあり、いはむとすれど口におどろを含めり、ただ松嶋やおじまといひてやみぬべし……。

また

時につけところにつけつつ人々の唐歌、大和歌すくなからず、されどわがのは一首もつかざりけり、勝景にのぞめばくちかならずをさるるといひしもげにさるものになむ。

と記して似雲も松島の絶景に聲をのんでしまつた。西行を慕つて奥羽地方に行脚した芭蕉・似雲の松島での感動は細かに味えば興のつきないところである。

このように彼は西行の歌を本歌として西行の心に密着した歌を隨所に詠んでいるのである。

六

次に西行塚の發見は彼の生涯においても最も忘れ難い感激であつた。これについて彼は「圓位上人古墳記」(「としなみ草」卷十六)を書いている。

西行上人の舊跡くにぐににおほかれど、身まかり給し所さだかならず、いかにもして尋えまほしく年比思ひすぐしつるに、或人並河永號五一郎のいひけるは上人終焉の地は河内の國石川郡弘川寺とふるきふみにも見えはンべればいにし比行て尋つれど所にもしれる人なくいたづらに歸りさふらひき、もしこころざしありなば、すぎやうにことよせて、彼あたりここかしこ日をかさねつつ、心をつくし求めなうば尋べしといひしかば、げにしか、しかはあれど、しぞきて思ひめぐらせば、是凡慮をもてはかりしるべきことにしもあらざりければ、享保十七壬子年二月三日の夜よりはじめ、石山寺にこもりぬて

石山やかたきこころにいのりなばなにかねがひのかなはざるべき

西行入寂の地については西行と交りの深かつた藤原俊成

の書いた「長秋詠藻」という書物に「文治五年に西行が河内の弘川という山寺で患つているとの事であつたから見舞の使者を走らせたところ、限りなくよろこんで病氣も大分よくなりつつあるからいずれ年の暮には京に上つてというていたのに果たされず、遂に年明けの二月十六日に亡くなつた云々。」ということが書かれている。似雲がその本を見る機會はなかつたのであるが、並河五一郎（註9）より示唆されたのである。しかし並河ほどの地理學者が調査したにもかかわらず弘川寺には見つからず空しく歸つているのである。そこで似雲はこれは凡慮をもつてはかりしるべきことではないと思つて石山寺に參籠し、「晝夜不臥七日七夜丹誠を盡して祈願し」たところ、「不思議なるかな」中日にあたる二月六日の曉、心も疲れてどうしようもなくなり頭陀袋に臂をささえて少しばかりうとうとした時に、五位鷺一つ飛ぶと見え、笠をひるがえし待つているとたちまちやつてきて、羽を休めたところで夢は跡なくさめてしまつた。似雲は是こそ觀音薩埵のおさとしであろうと思つたがその意味がわからない。「猶妙智力をそへさせ給へ」としばらくの間念じていると、「五人立ル路鳥立ル竹」という一句を「夢かうつつか感得」した。よく考えてみると夢の五位鷺と笠という文字をへん、つくり、くつかぶりを分けてみるとこの一句になる。更にこれから自分が尋ねて行くべき「山のたたずまい、河の流れ、墓の有さま迄、まのあたりに見るがごと」く、「恐しくも、有がたくも、身の毛いよだちてそぞろ寒く涙とどめがた」かつた。參籠みちて似雲はすぐさま弘川寺をたずねたが、その日は奇しくも二月十六日、上人の正忌日であつた。彼は涙をおさえてこの度の弘川寺訪問の由を告げたが、人々は「この寺のほとりには思いもよらず」と答えるだけであつた。その時、年十五、六ばかりになる文教という僧「この上に行塚といふものあり、經塚を言ひあやまりし」と言つた。そのことばにハッと胸をうたれた似雲は「それこそ西行上人の古つかなれ、いひあやまれるにはあらず、西行塚といふべきを上略して行塚といひしものなり。」と斷定して直ちに行塚に赴いた。行く人の數は五人、しかも夢に見た有樣と少しも違うことなく古墳うずだかくしてその前には昔あつた西行上人の遺像堂の跡と思われる礎（いしずえ）だけが殘つていて哀深かつた。「いざいざこなたへ」と誘つて塚頭を見あげると、小竹が少し生え出している。「是ぞかねて言ひしに違はず」と指さして教えたところ、御告の通り鳥鳴きたちて虚空に飛び去つた。

是を見てわれはいふも更也、相ぐせしともがら
も身を地になげうちて涙にむせかへり侍りぬ

尋えて袖になみだのかかるかな弘川寺にのこるふるつか

さすが感動の深くこもつたこの歌は「としなみ草」中の傑作であると言えよう。

古墳を發見したその翌年享保十七年（六十一歳）の二月十六日にも似雲は墓に詣でてまた感涙にむせんでいる。

こぞのけふここに此古墳をたづねえしことを思ひ出て

跡とひてことしもここにきさらぎやまた袖ぬらす望月の比

一木の櫻をたづさへゆきてつかのほとりにうへ侍るとて

一本もうへてさくらを手向ばやわが後世といひしるしに

折しもけさ齒一ッ落ければ是だにも結緣のためにと植る木の本にそへてうづみはンべりしつつみ侍に

西に行えにしともなれ古墳にうふるさくらもうづむおちばも

享保十九年（六十二歳）二月十六日には

行すゑのはるこそしられ尋えてみとせはつかに花たてまつる

元文四年（六十七歳）二月十六日は西行の五百五十年忌にあたるので南無阿彌陀佛の尊號を上においた六首の歌を手向け、[註10]「圓位上人古墳記」（円位は西行の法名）をまとめて弘川寺に奉納した。

以上西行塚發見の經緯と似雲の感動とについて考察したが、次いで注意させられることは、彼が六十八歳の時、西行の

佛には櫻の花をたてまつれわが後の世を人とぶらはば

の意をうけて西行塚の周邊に櫻の樹千株を植えたことである。それについて似雲は「種花記」[註11]（「としなみ草」巻十八）という美しい文章を作つた。

七

西行塚發見は似雲一生の最も大きなよろこびであつたが、これ以後の似雲の生活には、一段と徹底味が加わつていつたようである。

元文五年（六十八歳）の冬より似雲はえにしのある弘川寺のそばに草庵「花の庵」を結んだ。

圓位上人の古ことなンど思出て

なみならぬむかしの人の跡とひて弘川寺にすみぞめの袖

年明けて寶保元年の春をその草庵に迎えて、

水の音鐘のひびきも長閑にて弘川寺に春は來にけり

と詠んだが、そのほかこの「花の庵」に住んでいたころの彼の歌を少しあげると、

須磨あかし窓より見えて住庵のうしろにつづくかつらぎの峰

弘川やけふきさらぎの折にあひて涙さしぐむ花の木の本

弘川や流て西に行水もこし方人の跡したふらし

毎年二月十六日には西行追慕のこころをこめた歌を獻じ、又七十二歳の二月十六日には西行堂を建立し弘川寺に傳わる西行像を安置した。

西へ行しみかげを堂にうつしいれて花奉るけふの嬉しさ

この頃西行を仰いで佛道、歌道の一如を實踐して行つた彼の心はいよいよ高まつて行つた。その年の四月十五日より七月二十七日までの一夏は葛城の草庵に扉をとじて禪關に入り、その間に毎首に「かつらぎ」を詠みこんだ「葛城山居百首和歌」をつくり一言主神社に奉納した。この「葛城百首」は似雲晩年の心情の豊かにあらわれた歌である。今その中から數首をひいてみると、

しもとゆふかつらぎ山に門とぢてうき世をよそに心やすめん　…最初の歌…

かつらぎやかゝる心も言のはも絶て身にしむ秋のゆふぐれ

かつらぎやよそめさやかに海見えていり日かがやく淡路しま山

西へ行えにしむすびて葛城やひろ川寺にすめばこそすめ

限りありて百日閉にし柴の戸もけふ開けるかつらぎの山　…最後の歌…

このほか彼は藝術的にも豊かな天分にめぐまれていた。その筆跡はうるわしく畫もまた巧みであつた。小夜の中山を越える西行の姿を描き「年たけて……」の歌を賛した一軸は眞に迫るかと思わせる位すぐれており、又同じく中山を越える自分の旅姿に、「立歸り……」の歌を賛したものもあり、風景を描いたものも風趣にとんでいるし、阿彌陀尊像を描いた密畫や、更に自ら自分の像を刻したものも殘つている。

七十五歳の十二月ごろより和泉國蹈尾（つぐのお）の岡の北村六右衞門宅の境内にあつた常樂庵に住み、「としなみ草」末尾の第二十卷に自分の生涯を回顧して「思出草」をかいた。その終に「日毎に入日を拜みて老の身の思出とす、猶思出るに任せて、そこはかとなき和偈をつづりていは

く」と言つて詠んだ、

うけがたき人に生れし思出はみのりにあひぬる外はなし

から始まり、

老らくのよるのねざめの思出はむねをさすりて何もなし

何もみななし〳〵〳〵の思出はなし〳〵〳〵のなしもなし

に終る歌四十首はその悠々自適、自ら高かつた宗教的心境がよくあらわれている。

そして彼は自筆の「としなみ草」二十卷を、七十七歳の二月十六日に弘川寺に奉納した。五十七歳の二月十六日に髪を埋めて生葬し、心まことに西行を慕うことをあらわした彼はそれから二十年後の同じ日に生涯の歩みと歌四千五百餘首とを自ら整理し清書した「としなみ草」を西行のもとに捧げたのである。彼の生涯はまことに純粹無雜の精神でつらぬかれ、よき志願をよく遂げ得たといえよう。彼はよく始ありよく終ある人であつた。

寶暦三年七月十八日八十一歳で常樂庵にて往生を遂げた。

（註1）似雲法師についての研究は非常に少ないが、戸板短期大學の秋末政次郎教授が、昭和12年から16年ごろの雜誌「國の花」「雄山閣」「國學院雜誌」などに研究論文を發表しておられる。

（註2）「思出草」と殆ど同じ内容の文を母の五十回忌の時（似雲五十七歳）に「手向草」として記しているが、それによれば臍の緒の包み紙にかきつけてあつた二首の歌のほかに瀧の歌を一首、人からきいて記している。更にその母の瀧の歌の文字をよみこんだ長歌を作り母にたむけているが、その文章も又感銘の深いものなので一部紹介しておく、

亡母春月妙光大姉五十回忌も此春にめぐれり、されば このみ給ひしことにはンべればそこはかとなき言のはも、つづり手向なむと、とかく思ひめぐらしものすれども、何のよすがもなし、よめる歌、その世にかいやりすてたまひて、有し歌とては、彼包紙にのこさせ給ひしより外には、瀧の歌一首あり、此歌はわれおさなき時、ゆかりある人々、はは を誘ひ、すはうの國通づといふ所の山ふかくいりて魚きりときこへし瀧あり、是を見にまかり給ひて、此たきのほとりにおほきなる岩のはンべりつ、そのうへなる苔をむしろに、みななみゐて、つかみじかき筆なンどとうでてともにかきすさび遊び給ひしこと、おぼろげなる夢のやうにおぼえはンべりければ、其ころわらはにてめしぐせしもののありしかば、此事いかにととひきてはンべりしに母の歌とて

瀧つせの岩にくだけてちる玉はうき世の外のたからとぞ思ふ

といはほのさし出で、雨露のかからぬ所にかき給ひければ、程經ても見へつれど、今はあとかたなくきへうせぬとかたりはンべりし、もし今もその三十あまりの内、一もじにてものこりなば、分いりて見てましものをと、袖をぬらしはンべりき、されば母も山水を好みめでさせ給ひしよりうき世の外のたからとはよみ給ひけりと思へば、いとど涙は瀧に異ならず、さるに此遠忌にむかひて、この庵室をいとなみしことよ、所こそあれ戸灘瀬の瀧、龜の尾のたきのしら玉もげにうき世のほかの寶とぞおもふにも、涙の玉はちりそひぬ、彼瀧の歌の三十餘り二文字を、句毎のかみ、末の句の終りにをきて、たむけたてまつる長歌

たまゆらに　きしかたとをき　つきも日も　せにつながれぬ　のりのふね　いそぢにめぐる
はるの月　にしにはるけき　くになれど　たむくる法の　けふのには　てらすも弘き　ちかひにて　るてんの雲　たちまちに　まよひのきり
も　はれにけり　うれしさそひぬ　きくたびに
よに超にける　のりの聲　ほかにもとむる　かたぞなき　のこるこの身を　たらちねの　かたみとしれば　らうもうも　としいはけなき　そのかみを　おもひきえつつ　もゆるかげろふ

と手向たてまつりて、半百の年忌もすぎぬれば、世にこころかかづらふ事露ばかりもなし（註7に續く）

（註3）「としなみ草」巻一、正德五年（四十三歳）四月二十四日」一流歌人二十人の中にまじって「愛宕山法樂和歌」を獻詠した時の彼の歌に「如雲後改似雲」という記名がある。その後享保二年（四十五歳）武者小路家にて庭の櫻を詠んだ時には「似雲」と明記

（註4）森槃夫著「人物百談」によればある時師實陰と似雲との間に次のような問答があつたという。

實陰「そちは念佛三昧のために歌をやめることが出來るか」。

似雲「歌を止める事は出來ません。念佛の助業に詠みたのいで、どうか歌の正道に出るやう稽句が致したいのです」。

實陰「それはちと、成難い話であるが、まづ今の所では歌をやめて、すなほに一枚起請の通りに、念佛の安心を得らるるがよい。さうなれば自然歌の道も心安く行はれる。萬首の歌を詠んでも、眞實安心でなければ、歌の本筋に出ることはない。既に圓光大師は、歌は後世のために如何と問はれた時、罪にもなり功德にもなると答へ、又遍照といふ題で、月影のいたらぬ里はなけれども眺むる人の心にぞすむ、と詠まれた。法儀に心澄んでさへをれば、歌人でなくとも

かかる歌が詠めるではないか」。

（註5）「としなみ草」に實陰の名が初めて見えるのは、正德三年、似雲四十一歳の次の歌である。

よしのの花を手折て武者小路家へ奉るとて

言のはの光をそへよ君がためたをるよしのの花の一枝

武者小路前宰相實陰卿より御返し

折つるもさぞ與ふかきこころこそここによし野の花を見せけれ

（註6）「としなみ草」に西行の名が初めて見えるのは正德三年、四十一歳の春、吉野へ行つた時

西行法師住給ひし苔清水の舊跡をとひ詣でて

苔清水すみにし人の心さへくみてしらるるみよしのの奥

（註7）又はからざるに彼花の本にて春死なんと有し、西行上人の忌日もけふにあたれり、大和もろこし世捨人おほかる中に、此上人をわきてとし頃したはしく思ひはンべりき、やつがれも、あらかじめけふを忌日とさだめをきて、いける身ながらならびの岡のかたはらなる、西光庵にて葬をいとなみはンべりて、

我もけふ花の本にて先死なむ心の外に身は殘るともなき跡にもしも辭世を人とはば南無阿彌陀佛〳〵

享保十四己酉年二月十六日　似雲無心拜

（註8）宗旨證文の事

一、此似雲寺中僧代々淨土宗ニテ、當寺旦那ニ紛無ニ御座一候、此度諸國行脚ニ罷出候、若何方にても相果テ候ハバ、乍ニ御六ケ敷一死骸御取置被レ成可レ被レ下候、死後何方ヨリモ申分仕者無ニ御座一候。爲レ其本人手形ニ添證文如レ件

享保十五年庚戌十月七日　山城國葛野郡御室池上

西光庵㊞

（註9）並河誠所ともいい、伊藤仁齋の弟子、「五畿內誌」の著者。似雲は東國行脚の時、この誠所の三嶋の別亭である富士見亭で元旦の富士を眺めた。

（註10）なき人の遠きむかしになりにけり詞のはなは色もかはらで

むなしとは思ひながらも花にそむ心のいろの誰かなからむ

あくがるる花の色香もしばしにてとまらぬものと山風ぞふく

みちかへてまだ見ぬかたのよし野山花の枝折の跡やしたはむ

たがはずよかねて願ひの花の本げにきさらぎの望月の比

ふるつかを人とぶらはば五百年や五十のはるに花たてまつれ

（註11）「種花記」の後半のみをあげておく、

行末は春毎に花さきそひなば花見にとむれくる人おほかるべしとうれしく思ひはンべりて、又思ひかへせば上人

の歌に、花見にとむれつつ人のくるのみぞあたらさくらのとがには有ける、とよみ給へば末の世にいたりて、此山のさか行ままに、花のころ花の木陰にて、酒宴亂舞なンどもよほすともがらもありなば此寺の僧徒中よりかたく制すべし、此山のさくらはもとより上人のふるつかへの手向なればそのこころざしをわするべからず、又此後建立修覆のことも、この山松のはしら草ふきにしつらひはンべらば、それこそ上人のこころならめ、かならず美麗を好むべからず、又寄付の器物もあやしく異やうなる古物を、上人在世の時の御持物なンどいひなしてたむくる人ありとも、是を用ゆべからず、さのごとく凡慮卑俗のはからひにて、正風閑雅の上人を、後世あしざまにもてなしはンべらば、こころあらむ人は、此寺の住侶のこころざし迄淺はかに思ひ眉をひそむべし、又歌奉納の人も言の葉をのみかぎり、心のまことなくして千首萬首手向るとも上人のこころにはうけ給ふまじ、たとひ樵夫牧童うしの角もじもわきまへず、文字の教はあはずとも、まことよりくちずさび、一えだの花もささげなばいかばかり、上人は嬉しくうけたまひなむ、されば奉納の人のみならず此てらの僧徒たちも、無欲清淨にして、奉納手向の和歌をうけはンべらば、上人の心にかなひて、行末は寺々も花とともにさかへなむ、もし御法のみちになぞらへ歌のことによそへ、たからをえまほしく思ふともがらもあらば上人のほいにたがふべし、むかし上人かまくらにて時の武將より白がねの猫をたまはりしに、をもくうけてかろくすて給ひしこと、思ひはかるべし、思ひはかりて、上人のこころざしにかなひなば、此寺の本尊藥師如來、高祖弘法大師のみこころにもそむかずして月々年々にまねかざるに幸きたりて、この弘川寺行末ながく絶ずさかへ榮なむことたなごころを見るがごとし

行すゑのかた見ともなれ弘川にけふかきながす水莖

のあと

元文五年卯月廿八日　　釋似雲（花押）